

「2024年韓国・延世大学校スプリングスクール派遣報告書」

京都大学法学部2年 下宮 良真

① 学習成果

今回の研修を通して、異文化を理解し共生を図ることは、人々が考えていることよりも容易なことなのではないかと思うようになった。研修の中で韓国だけでなく、さまざまな国・地域から訪韓した人々と出会い、交流し、親交を深める機会があった。そのような体験をしていく中で、渡韓前にあった外国人との交流をどこか恥じらいや恐れから躊躇してしまうような気持ちがだんだんと薄れていくのを感じ、自分と他者を違う国出身の違う文化を持った人と考えるよりも、対等な人と人の関係を築くことができるようになっていったと感じた。このような意識の変化は、グローバル化が急速に加速している現代において必要なものであり、今後の人生において重要な経験であったように思われる。一方で、それと同時に自らの言語運用能力の低さも痛感した。韓国語の上達もちろん今後の課題ではあるが、同時に英語力を向上させることが責務であると感じた。将来、国際社会で活躍できる人物になるためにも、英語の学習に加え海外留学にも取り組みたいと考えるようになった。

② 海外での経験

今回の海外派遣が自分の人生の中で、アジアの国での初めての長期滞在であった。そのため、初めてのことや、いわゆるカルチャーショックのような経験もあった。わかりやすいものと言えば、韓国には本当に辛い料理がたくさんあるということだ。一方で、普段あまり取り沙汰されることはないが、ポジティブな意味でのカルチャーショックもしばしば経験した。街中では、おじいさん、おばあさんがどこから来たのと優しく声をかけてくれ、大学では韓国人の学生らが流暢な英語でディスカッションを行っていた。これらの体験は自分の価値観を改める契機となり、またもっとさまざまな国に行き、その国の文化を体験してみたいと考えるように気持ちを変化させた。

③ プログラム内容

プログラムの内容としては、延世大学での語学授業が最も印象に残っている。語学授業には日本以外にも、アジアや欧米などのさまざまな国から来た語学学習に前向きな生徒が集まっており、彼らと互いに切磋琢磨していくのは有意義なものであったと思う。また、文化体験や聴講も非常に興味深い内容のもので、京都大学のこの研修を通してのみ体験できたことだったので、この研修に参加できてよかったと思う。

④ 進路への影響について

自分は派遣前から外務省で働きたいと考えていたが、この研修を終えてその気持ちがより強まったと感じている。研修を通して国際社会により関心を向けるようになり、特に日韓関係の過去と現状にはより強い関心を抱くようになった。この経験を活かして、将来的に外交官として国際社会で活躍し、日韓関係の調整を図ることのできるような役職に就くことができればいいと思うようになった。

UIC 聴講について

UIC での授業の聴講に参加して自分が感じたことは大きく二点ある。一点目は、現地の学生たちの授業に対する姿勢が非常に前向きで、発言することを恐れていないということである。授業内で、教授が学生らの意見を求めた際には、生徒が次々に発言し、議論を行い、生徒同士で言葉を掛け合うような場面も散見された。このような光景は自分にとって新鮮であり、発言を恐れない姿勢に感銘を受けた。二点目は、現地の学生の英語が非常に流

暢であるということである。参加した授業が国際学部のものであるということも関係しているのかもしれないが、自分の考えを英語で簡潔に要約し、抽象的な内容でも活発に議論をしている場面を度々目にして、韓国の英語教育がいかに進んでいるのかを痛感した。今後、海外留学などに参加するにあたって、英語の読み書きだけでなく、日本人が不得意だとされているスピーキング・リスニングにも力を注いでいく必要があると感じた。授業内容としては、Visual Culture という授業が最も印象に残っている。現地の学生数人とグループになり、絵画を並べ、物語を創作するという内容の授業だったが、英語でのディスカッションは想像よりも難しく、自分の考えや意図を伝えることに苦戦した。このような英語で活発な議論をする機会は、自分にはあまり経験がなかったので有意義なものであった。